

C-66 長崎県における婦人の被服調整に関する調査
長崎県立女子短大 ○前川清子 串山美津子

目的 生活の合理化にともなう、衣生活の内容もかなり変化しつつある今日、被服構成の立場から長崎県下の洋服と和服がどのように調整されているかを知り、今後の構成のあり方を考えるために、昭和38年、42年、46年のそれらの所持数、調製法について年令別に調査したものを報告する。

調査対象および方法

調査年月	昭和38年9月	昭和42年9月	昭和46年9月
調査対象	670名	2115名	1541名

調査方法 各地の川中学校、高校を介して傾向紙法により行った。

結果 枚数 洋服の一人平均所持数は44.6枚、和服は31.7枚でその差は12.9枚である。経年的に洋服は増加の傾向を示し、和服は増加が認められない。年令別には洋服は20代の所持数をもっとも多く、年令が高くなるにつれて少なくなっている。和服は逆の傾向を示す。経年的には洋服は各年令とも増加の傾向を示すが、和服は高年令にのみ増加が見られる。

調製法 洋服は各年度とも既製が多く注文、手製が少ない。経年的に既製の伸び率がいちじるしい。和服は各年度平均すると既製と手製がほぼ同率で注文がやや多く、経年的には既製が伸び、手製が減少して注文は差が見られない。年令別には各年令とも既製は差が認められず、手製は20代をもっとも少なく、高年令になるほど多くなり、その割合だけ注文が減少している。